

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

始



1  
2  
300

女子  
教育  
日本文法教本

金澤庄三郎著  
下巻



11-300



文學博士 金澤庄三郎 著

# 女子教育 日本文法教本

株式會社 東京開成館

## 下卷目次

第一章	動詞の性……………	一
第二章	動詞の語尾の假名遣……………	四
第三章	動詞、形容詞の音便……………	七
第四章	品詞の轉成……………	一〇
第五章	文及び文の主要成分……………	三
第六章	文の主要成分の構成……………	七
第七章	修飾語……………	二
第八章	句節……………	五
第九章	文の主要成分の位置……………	三〇
第十章	文の主要成分の併置……………	三三

大正 8.12.12 内交

下卷目次



第十一章	文の主要成分の省略	三七
第十二章	文の組織	三九
第十三章	文の性質	四二
第十四章	係結法	四六
第十五章	文の解剖	五〇



女子教育 日本文法教本 下巻

文學博士 金澤庄三郎 著

第一章 動詞の性

他動詞。

太郎、字を書く。

次郎、球を打つ。

この例の中なる書く、打つといふ動作には、必ずその動作の及ぶ字、球などの事物なかるべからず。かやうの性質の動作を他動といひ、他動をあらはす動詞を他動詞といふ。自動詞。



花咲く。

馬走る。

この例の中なる咲く、走るといふ動作には、その動作の及ぶ事物を要せず。かやうの性質の動作を自動といひ、自動をあらはす動詞を自動詞といふ。

動詞の性と活用。動詞には語根を同じくしながら、性の異なるによりて、活用を異にするものあり。例へば、折るといふ動詞は、自動をあらはすときは下二段活用をなし、

雪にあひても柳は折れず。

他動をあらはすときは四段活用をなす。

雪は柳を折らず。

また性は異なれども、活用は異ならざるものあり。例へば、

吹くといふ動詞は、自動のときにも、他動のときにも、共に四段活用をなす。

風吹かず。

われは笛を吹かず。

練習問題

(イ) 次の動詞の自動、他動を分ち、その活用を述べよ。

一、衣裂く、  
衣を裂く。

二、戸開く、  
戸を開く。

三、舟洗む、  
舟を洗む。

四、人笑ふ、  
人を笑ふ。

五、足進む、  
足を進む。

六、木立つ、  
木を立つ。

(ロ) 次の文中の空處に適當なる語尾を補入せよ。

- 一、塵積——て、山と成——。
- 二、塵を積——て、山と成——。
- 三、星の光やうやく消——て、鶏の鳴く聲遠く聞——。



第二章 動詞の語尾の假名遣

動詞の語尾、即ち活用する部分の假名は、紛るゝこと多ければ、その辨別の方法を説かん。

○、かわく〔乾く〕、たはむる〔戯る〕の如く、語根の假名の紛れ易きものは、上巻の附録に載せられたれば、今は説かず。

ハ行、ヤ行、ワ行の假名。 動詞の語尾の假名にて紛れ易きは、主としてハ行、ヤ行、ワ行なり。 その中にて、ヤ行、ワ行は數多からざれば、これを記憶し、他はハ行なりと斷定すべし。 ヤ行の假名を用ふる動詞の普通なるものは、次の如し。

- え、ゆ。 老ゆ。 悔ゆ。 報ゆ。 (ヤ行上二段活用)
- い、ゆ。 甘ゆ。 嘶ゆ。 癒ゆ。 覺ゆ。 聞ゆ。

ヤ行の假名

ワ行の假名

用ふるはハ行上二段にも活用す。

ワ行の假名を用ふる動詞の普通なるものは、次の如し。

- る。 率ゐる。 用ゐる。 (ワ行上一段活用)
- ゑ、う。 植う。 飢う。 据う。 (ワ行下二段活用)

以上の外はハ行にて、ひ、ふ、への假名と知るべし。 即ち思ひ、教ふ、堪へなどの如し。

ザ行、ダ行の假名。 次に紛れ易きはザ行じ、ず、ダ行ぢ、づの假名なり。

ザ行の假名を用ふる動詞は次の如し。

ザ行の假名



ぜ、ず。混ず。(ザ行下二段活用)。  
じ、ず。論ず。混ず。重んず。この他、すべてサ行變

格に活用するもの。

以上の外はダ行にて、ぢ、づの假名を用ふるものと知るべし。即ち恥ぢ、恥づ(ダ行上二段活用)、出づ、秀づ(ダ行下二段活用)の如し。

練習問題

- 次の文章の空處に適當なる語尾の假名を補入せよ。
- 一、絶えず勉むる人は、困難なる任務にも堪へ得べし。
  - 二、岩を攀じ、山を越へて進めば、深き谷の上に出。
  - 三、燈火消したれば、四顧暗黒にして、咫尺も見えず。
  - 四、對岸には山高く聳へて、呼ばば將に應へんとす。
  - 五、飢へて穀を種へとも及ばじ。

第三章 動詞、形容詞の音便

動詞、形容詞が他の語と連なる時、發音の便宜によりて、その語尾の音を變ずるを、音便といふ。

動詞の音便。動詞はその連用形が助詞でたりに連なるとき、音を變ずることあり。例へば、

書きて、書いて(たり)。  
防ぎて、防いで(だり)。

これはきぎの音がいに變ずるものなり。

○ぎの音がいに變ずるときは、助動詞でたりはでだりに變ず。

請ひて、請うて(たり)。

これはひの音がうに變ずるものなり。



戦ひて、 戦つて(たり)。

勝ちて、 勝つて(たり)。

取りて、 取つて(たり)。

ありて、 あつて(たり)。

これはひ、ち、りの音がつに變ずるものなり。

飛びて、 飛んで(だり)。

讀みて、 讀んで(だり)。

死にて、 死んで(だり)。

これはび、み、にの音がんに變ずるものなり。

○この場合にも助動詞て、たりは濁音に變ず。

形容詞の音便。

善きかな、 善いかな。

悲しきかな、 悲しいかな。

これは連體形のきの音がいに變ずるものなり。

辱くす、 辱うす。

美しく咲く、 美しう咲く。

これは連用形のくの音がうに變ずるものなり。

練習問題

(イ) 動詞の音便を生ずる活用形を述べよ。

(ロ) 左の文中の空處に語尾の假名を補入せよ。(音便あらば、それを用ひよ)。

一、言<sup>い</sup>て行<sup>い</sup>ことは難し。

二、仰<sup>おほ</sup>いで天に愧ぢす。

三、奮<sup>ふる</sup>いて進むに非ざれば、その任を全<sup>と</sup>するを得ず。

四、朝<sup>あさ</sup>に星を戴<sup>かぶ</sup>いて出で、夕に月を踏<sup>ふ</sup>いで歸る。

五、行<sup>い</sup>まじき事を行<sup>い</sup>て、嚴<sup>げん</sup>し<sup>く</sup>論<sup>ろん</sup>されたり。

六、花開<sup>はな</sup>いて鳥啼<sup>とり</sup>く、あゝ樂<sup>たの</sup>し<sup>く</sup>かな。



第四章 品詞の轉成

品詞の轉成。

(一) 東の空かすみ(動詞)て、日出でたり。  
春の野にかすみ(名詞)たなびけり。

(二) 雪は白く(形容詞)炭は黒し。  
雪白く(副詞)積れり。

この例にて、動詞なるかすみが名詞としても用ひられ、形容詞なる白くが副詞としても用ひらるゝ如く、同じ語にて一つの品詞より他の品詞に轉じて用ひらるゝことあり。かやうに一つの品詞より轉じて他の品詞に用ひらるゝを、品詞の轉成といふ。

今動詞、形容詞が轉じて他の品詞となるには、如何なる活用形よりするかを述べべし。

動詞の連用形。

朝日の光まばゆし。

師の教を守る。

この例のうちなる名詞光は動詞光るの連用形より、名詞教は動詞教ふの連用形より、おのゝ轉じたるものなり。かやうに動詞は、その連用形より轉じて、名詞となることあり。助動詞の連用形も、その結びつきたる動詞などと共に轉じて、名詞となることあり。

囚はれの身を悲しむ。

世の見せしめとす。



形容詞の連用形。

草青く茂れり。

風烈しく吹く。

この例にて、青く、烈しくは形容詞の連用形なるに、茂れり、吹くといふ動詞の意味を限定して、副詞の用をなせり。かやうに形容詞は、その連用形より轉じて、副詞となることあり。

○形容詞の語根は名詞として用ひらるゝことあり。例へば、白は清淨にして、赤は美麗なり。

練習問題

- 一. 次の文章につきて、品詞の轉成を説明せよ。
- 二. そのよろこび何にかたとへん。
- 三. 花美しく咲く。
- 四. まなびの道を勵むべし。

- 四. かれは友と親しく交れり。
- 五. 善き行ある人には喜多し。
- 六. 父のゆるしを得て、旅行したり。
- 七. 國民の力のかぎりつくすこそ、  
わが日の本のかためなりけれ。(明治天皇御製)

第五章 文及び文の主要成分

文。

花咲く。

水清し。

われ書を讀む。

この例の如く、單語の相集りて、一つの完全なる思想をあらはすときは、これを文といふ。



主語、述語。右の文は、それごとく、花、水、われにつきて、その状態、動作などを述ぶるものにて、即ち

花、水、われ

は、いづれもその文の主題なり。かやうの語を主語といふ。また右の文のうちなる

咲く、清し、讀む

は、それごとく、その文の主語たる花、水、われの状態、動作などを述ぶるものなり。かやうの語を述語といふ。

いかなる文にも、必ず主語と述語とをなかるべからず。  
客語。

われ書を讀む。

右の文にて、われは主語、讀むは述語にて、主語と述語とは備

れども、述語なる讀むは他動詞なれば、この他になほその動作の及ぶ事物を示す書をとといふ語をなかるべからず。かやうの語を客語といふ。

補語。

われ舟に乗る。

右の文にて、われは主語、乗るは述語なり。されど、なほ舟にといふ語にて述語の意味を補ふにあらざれば、完全なる思想をあらはすこと能はず。かやうの語を補語といふ。

述語の性質によりては、文に、主語と述語との他に、客語と補語とを二つながら要することあり。

父、家を子に譲る。

右の例にて、家をは客語にて、子には補語なり。



文の主要成分。上に説きたるが如く、文には必ず主語と述語とをなかるべからず。またその述語の性質によりては、客語と補語とをなかるべからず。されば主語、述語、客語、補語の四つを文の主要成分といふ。

練習問題

- (イ) 文の主要成分を挙げよ。
  - (ロ) 次の文の主要成分を指示せよ。
- 一。 火燃ゆ。
  - 二。 楠木正成は忠臣なり。
  - 三。 咲けるは藤なりや。
  - 四。 春雨こそ降れ。
  - 五。 子ごも犬を追ふ。
  - 六。 かれは外國人と交際せり。
  - 七。 夕日は水面を照らせり。

- 八。 進退禮にかなへり。
- 九。 われはかれを醫者と思ひぬ。
- 一〇。 父は手紙を兄に託したり。

第六章 文の主要成分の構成

主語の構成。主語は名詞または代名詞にて成る。

花開く。  
われ行く。

○主語として用ひられたる名詞、代名詞はまた種々の助詞を伴ふことあり。

日本は強し。	花が開く。	人の行く。
友も来る。	春ぞ樂しき。	たれかある。

述語の構成。述語は主として動詞、形容詞にて成る。



鳥飛ぶ。

花美し。

○述語はまた助動詞を伴なふことあり。

空霽るべし。

月出でたり。

われも行かむ。

また助詞を伴なふことあり。

水清きか。

準備終りたりや。

名詞、代名詞と助動詞なり、たりと結びつきたるものは、述語を成すことあり。

正成は忠臣なり。

東京は大都會たり。

君はたれなるか。

客語の構成。客語は名詞または代名詞にて成る。

力山を抜く。

父われを召す。

客語は必ず助詞を伴なふ。

○客語の伴なふをは往々省略せらるゝことあり。

われも書讀まん。

補語の構成。補語は名詞または代名詞にて成る。

校長は卒業生に證書を授けらる。

兄は陸軍大尉となる。

春花錦の如し。

村長はかれらより信頼せらる。

補語は必ずに、と、の、よりなどの助詞を伴なふ。

○動詞形容詞助動詞の連體形が下なる名詞を略せられて、名詞の如く用



ひられたるものも、また名詞と同じく、文の主語、客語及び補語となることを得べし。

降る(もの)は春雨か。

新しき(物)はよし。

産まれたる(兒)は男兒なり。

妹は赤き(衣)を紫なる(衣)と著かへたり。

練習問題

- (イ) 述語の構成を説明せよ。
- (ロ) 補語の構成を説明せよ。
- (ハ) 次の文の主要成分をさし示せ。
  - 一、 山もかすみり。
  - 二、 鶯や啼く。
  - 三、 先生書を著さる。
  - 四、 はたらくは業なり。
  - 五、 叔父上は一家を朝鮮に移されたり。

(ニ) 次の文に客語、補語または述語を補へ。

- 一、 馬 <sup>ト</sup> 蹴る。
- 二、 生徒は <sup>三</sup> 答ふ。
- 三、 父は弟を學校に <sup>行カセ</sup> 行かせる。
- 四、 蠶 <sup>吐</sup> 吐く。
- 五、 犬は人に <sup>ホユ</sup> 咬む。
- 六、 われは <sup>物ヲ</sup> 買ふ。
- 七、 商人は <sup>物ヲ</sup> 送る。

第七章 修飾語

梅の花咲く。

水甚だ清し。

われは新しき書を読む。

この例のうちなる梅の花は花に附屬し、甚だは清しに附屬し、



新しきは書に附屬して、いづれもその意味を修飾せり。かやうに文の主要成分に附屬して、その意味を修飾する語を修飾語といふ。

主語の修飾語。

住む人稀なり。

春の風吹く。

右は修飾語の主語に附屬したる例なり。

述語の修飾語。

花漸く散る。

日は東山より出づ。

道は遠けれども平坦なり。

右は修飾語の述語に附屬したる例なり。

客語の修飾語。

われは梅の花を愛す。

われらは行く春を惜しむ。

右は修飾語の客語に附屬したる例なり。

補語の修飾語。

弟、繪はがきを遠地の友人に贈る。

妹もわが學校に入學せり。

右は修飾語の補語に附屬したる例なり。

複雑なる修飾語。修飾語には、種々の語の集りて成れる複雑なるものあり。左に數例を示す。

繪に書きたる花はかをらず。

白菊甚だ美しく咲けり。



われは外國に行く人を送る。  
われも始めて日本に来れる外國人に逢ひたり。

修飾語の位置。 前の諸例に見ゆるが如く、修飾語は文中にありて、その附屬する語の直上にあるを通例とす。されど

空しく花は散りぬ。

汝は怠らず數學を學ぶべし。

アイヌは巧に猛き熊を捕ふ。

始めてわれは獅子を見たり。

この例の如く、述語に附屬する修飾語は、その間に他の語を挟みて、上の方にあること多し。

練習問題

- (イ) 修飾語とは如何なるものなるか。
- (ロ) 次の文のうちより修飾語をぬき出し、その如何なる主要成分に附屬せ

るかを説明せよ。

- 一. わかき人魚を釣れり。
  - 二. 夕立烈しく降り來れり。
  - 三. 校長は正直なる生徒を譽めたり。
  - 四. 醫師病みたる犬に藥を與ふ。
  - 五. 紫式部は源氏物語を作りたる才女なり。
  - 六. 月は川を流るゝ水に映れり。
- (ハ) 次の文に幾つかの修飾語を加へよ。
- 一. 山登ゆ。
  - 二. われは舟にて川を渡りき。
  - 三. 鳥花に啼く。

第八章 句 節

句。

花の咲けるは、かの山なり。



われは水清き川に遊びたり。

この例の花の咲ける、水清きの如く、主語、述語を具へたる一つの文がその獨立を失ひて、他の文の一部分となりたるときは、これを句といふ。

句は文中にて主語、述語、客語、補語及び修飾語の如く用ひらる。

主語の如く用ひらるゝ句

花の咲けるは、かの山なり。

わが小學校を卒業したるは、十四歳の春なりき。

右は句が主語の如く用ひられたる例なり。

述語の如く用ひらるゝ句

牛は力強し。

この川は水清し。

右は句が述語の如く用ひられたる例なり。

○述語の如く用ひらるゝ句のある文にては、その主語を文主ぶんしゅといふことあり。この例にては牛は川は文主なり。

客語の如く用ひらるゝ句

人は皆老の身に至るを知らず。

われは花の紅なるを好む。

右は句が客語の如く用ひられたる例なり。

補語の如く用ひらるゝ句

われらは衣の薄きに慣れぬ。

われはかれの歸るに逢ひたり。

右は句が補語の如く用ひられたる例なり。



修飾語の如く用ひらるゝ句。

われは水清き川に遊びたり。

風吹けば花散る。

右は句が修飾語の如く用ひられたる例なり。

節。

山高く、海深し。

この文は

山高し。

海深し。

の二つの文を併置して、更に一つの文となせるものなり。かやうに、文が他の文と併置せられたるものを節といふ。この例にて、山高く及び海深しは、いづれも節なり。

練習問題

次の文のうちより、句と節とをぬき出し、句につきては、文中にてそれがいかに用ひられたるかをいへ。

- 一。月夜に花の散るは、いとあはれなり。
- 二。われは甚だ丈の高き人に逢ひき。
- 三。水落ち、石露る。しつ
- 四。われは昨夜時鳥の鳴くを聞きたり。
- 五。櫻は花美し。
- 六。日の出でざるうちに、われは旅宿を出發したり。
- 七。柳は緑にして、花は紅なり。しつ
- 八。かれの演説は、水の流るゝが如し。
- 九。人の貴きは徳あるがためなり。
- 一〇。月落ち、鳥啼き、霜天に満つ。しつ
- 一一。人は孝の尊きを知り、之を行ふことの難きを知らず。しつ
- 一二。敷島の大和心のをゝしさは、事ある時ぞあらはれにける。(明治天皇御製)



第九章 文の主要成分の位置

主語と述語との位置

雨降る。

風寒し。

この例の如く、主語と述語とより成れる文にては、主語は上にあり、述語はその下にあるを通例とす。

○主語の如く用ひらるゝ句及び述語の如く用ひらるゝ句も、またこれと同じ。

林檎の落つるは引力のためなり。

この川は水清し。

客語と補語との位置

人々繪を見る。

騎兵馬に乗る。

われは花を友に與へん。

生徒は先生に記念品を贈れり。

母上は妹らをして袷を單衣に著かへさせたまへり。

この例の如く、客語及び補語は、主語と述語との間にあるを通例とす。

○客語の如く用ひらるゝ句及び補語の如く用ひらるゝ句も、またこれと同じ。

われは花の紅なるを好む。

われはかれの歸るに逢ひたり。

文の主要成分の倒置。上に説きたる主語、述語及び客語、補



語の位置は、わが國語にての自然の順序なれども、意味の上より便宜にこの順序を變ずることあり。

行け、君よ。

美しきかな、牡丹の花は。

これらは述語を先に立たしめたる例なり。

一行を市民は優遇せり。

動物園を君は見たるか。

これらは客語を先に立たしめたる例なり。

舊師にわれは逢ひたり。

的に矢あたれり。

これらは、補語を先に立たしめたる例なり。

練習問題

次の文の主要成分を通常的位置に置きかへよ。

- 一、尊きかな、わが國體。
- 二、祝へ、諸人、けふのよき日を。
- 三、諸君の健康を、われは祈るなり。
- 四、白きが中に黄なるがまじりぬ。
- 五、優等生に校長は賞品を與へたり。
- 六、諸君自重せられよ、わが國家のために。
- 七、姉には掃除を、弟には草取を母は命じたり。
- 八、こゝを田舎なりと、われは思はざりき。
- 九、くにたみは一つと、るに守りけり、遠つみおやの神のをしへを。

(明治天皇御製)

第十章 文の主要成分の併置

一つの文のうちに、同じ種類の主要成分が併置せらるゝことあり。左の如し。



主語の併置。

昨日今日は殊に暖し。

梅も桃も咲きたり。

右は主語を併置したる文の例なり。

客語の併置。

汝鉛筆と紙とを持ち來れ。

姉は茶の湯をも活花をも學びたり。

右は客語を併置したる文の例なり。

補語の併置。

人々は舟にも車にも乗れり。

日本は支那とロシアとに勝ちたり。

右は補語を併置したる文の例なり。

述語の併置。

花は咲きまた散る。

正行は忠臣にして且孝子なり。

右は述語を併置したる文の例なり。

述語はまた客語或は補語と共に併置せらるゝことあり。

農夫は稲を蒔き、また麥を刈りたり。

われは太郎に紙を與へ、次郎に筆を與へたり。

修飾語の併置。修飾語もまた主要成分の如く併置せらるることあり。

けふのよき日は大君の生まれ給ひし日なり。

肖像は美しく巧に畫がかけたり。

弟は大きなる白き花を摘みたり。



われはわがなつかしき母に別れき。  
人々は京都と奈良とにて秋光を賞せり。

練習問題

次の文に就きて主要成分の併置を説明せよ。

- 一 信長と秀吉とは共に尾張の人なり。
- 二 われは庭に柳、櫻を植ゑ交せたり。
- 三 われは今朝手紙を伯母と従妹とに贈れり。
- 四 人々歌ひ且舞ふ。
- 五 父は姉をもわれをも等しく愛し給へり。
- 六 友もわれも同じ年に生まれ、同じ學校を卒業せり。
- 七 雨は昨日も降り、今日も降れり。
- 八 社長は技師と支配人とをして工場を検査せしむ。
- 九 かの地は風景美しく、人情やさし。

第十一章 文の主要成分の省略

文の主要成分の省略。文の主語、述語、客語及び補語は、これを言外に推知することを得べき場合には、便宜に省略することあり。

〔子は〕父母に孝なるべし。

〔人は〕菊を齡草ともいふ。

右は文の主語を省略したる例なり。

述語の省略。

父はいづこに〔おはしますか〕。

甲は西に〔去り〕、乙は東に去れり。

右は文の述語を省略したる例なり。



客語の省略。

われも書を読み、かれも書を讀めり。  
賢人あらば、われはそれを師とせん。

右は文の客語を省略したる例なり。

補語の省略。

受験者は正午までに答案を試験官に提出すべし。  
われは友より借りたる書を友に返しぬ。

右は文の補語を省略したる例なり。

練習問題

次の文に就きて、その主要成分の省略を説明せよ。

- 一、堤の上に登るべからず。
- 二、あなたは只今ごちらに。
- 三、かれは怠惰にして、遂に罰せられたり。

四、いで諸君に美しき花を見せん。

五、父は家に、兄は満洲に、姉は東京の學校にあり。

六、餘暇あらば、書を読むべし。

七、珍しき客なれば、あはん。

八、親鳥は蟲を食ひ、また子鳥にも食はしむ。

第十二章 文の組織

文の組織上の類別。文はその組織の上より類別して、これを單文と複文と重文との三つとなすことを得べし。

單文。

花咲く。

われは書を読む。

父、家を子に譲る。



この例の如く、句を含まずして単一なる敘述をなせる文を單文といふ。

○文の主要成分に種々なる修飾語を加へたるものも、句を含まざれば、單文なり。例へば、

櫻の花美しく咲く。

われは昨日孝子の話を記したる書を読みたり。

複文。

林檎の落つるは引力のためなり。

牛は力強し。

われは花の紅なるを好む。

われはかれの歸るに逢ひたり。

風吹けば、花散る。

この例の如く、句を含みたる文を複文といふ。  
重文。

山高く、海深し。

姉は軍人に嫁し、兄は大學を卒業し、妹は學校に通へり。

この例の如く、二つ以上の節より成れる文を重文といふ。

父の恩は富士山の高きよりも高く、母の恵は太平洋の深きよりも深し。

右は複文より成れる重文なり。

練習問題

次の文を單文と複文と重文とに分けよ。

- 一、土塊の下に小さき莖咲けり。
- 二、勝ちて兜の緒を締めよ。
- 三、平家の軍勢は、水鳥の飛び立つ音に驚きたり。



- 四 姉は花を活け、妹は琴を弾す。
- 五 樺太に住むアイヌは臺灣に住む生蕃よりも王化に親しめり。
- 六 君辱めらるれば、臣死す。
- 七 義は泰山よりも重く、死は鴻毛よりも軽し。
- 八 人間到るところに青山あり。
- 九 國民は舉りてわが叡聖文武なる天皇陛下の萬歳を祈れり。
- 一〇 楊柳茂り易けれど、秋風に耐へがたく、輕薄なる人は交り易けれど、信少し。

第十三章 文の性質

文の性質上の類別。文はまたその敘述の性質の上より類別して、平敘文、疑問文、命令文、感歎文の四つとなすことを得べし。

平敘文。

櫻の花咲く。

弟は學校に行く。

われは長き堤の上を散歩したり。

これらの文はいづれも思想をそのままに敘述したるものなり。かやうの文を平敘文といふ。

疑問文。

弟は既に學校に行きたるか。

われはいづれの道を行くべき。

馬に乗りて行くは誰ぞ。

これらの文はいづれも疑問の意をあらはせるものなり。かやうの文を疑問文といふ。



君の命いかでか背き奉るべき

われ豈人後に落ちんや。

これらもまた疑問文なれど、かへりて反対に決定する意をあらはせり。かやうの文を反語の文といふ。

命令文

急ぎて行け。

公園の樹木を折り取るべからず。

人をそしることなかれ。

これらの文は、いづれも命令または禁止の意をあらはせるものなり。かやうの文を命令文といふ。

○右の例に見るが如く、命令文にては多く主語を省略す。

感歎文

あはれ春の夕は楽しきかな。

あゝ日本國に生まれたるわれらは幸なるかな。

これらの文は、いづれも感歎の意をあらはせるものなり。かやうの文を感歎文といふ。

練習問題

次の文を平叙文、疑問文、命令文、感歎文に分けよ。

- 一。河海は細流を擇ばず。
- 二。やよや待て、山時鳥。
- 三。君の功勞は實に偉大なるかな。
- 四。われは如何にして忠と孝とを全くすべきか。
- 五。一寸の光陰も輕んずべからず。
- 六。ローマは一日にして成らずといはずや。
- 七。あゝ先生は遂に白玉樓中の人となり給ひしよ。
- 八。歳寒くして、松の操を知る。



九。大國民たるもの豈輕佻なる行ありて可ならんや。  
一〇。枯枝に鳥のとまりけり、秋の暮。

### 第十四章 係結法

母は子を育つ。

川の水清し。

昨日雪降りき。

この例の如く、文を終止するには活用ある語の終止形を用ふるを普通とすれども、述語の上にある助詞によりて、或は連體形を用ひ或は已然形を用ふることあり。左にこれを説かん。

連體形を用ふるもの。

母ぞ子を育つる。

川の水をむ清き。

昨日ぞ雪は降りし。

この例の如く、述語の上にぞまたはなむといふ助詞の加りたる文にては、連體形を用ひて終止するを法とす。

母や子を育つる。

川の水や清き。

たれかある。

いかにしてか知りし。

この例の如く、やまたはかといふ助詞が述語の上にある疑問文にても、同じく連體形を用ひて終止す。  
已然形を用ふるもの。



母こそ子を育つれ。

川の水こそ清けれ。

昨日こそ雪は降りしか。

この例の如く、述語の上にこそといふ助詞の加りたる文にては、已然形を用ひて終止す。

係結法。以上のぞ、なむ、や、か、こそその助詞を係といひ、係の助詞に應じて或は連體形、或は已然形を用ひて終止するを結といひ、これらに關する法則を係結法といふ。  
句の中の係。

雨なむ降るに、風さへ吹き出でたり。

孝こそいみじき徳なるに、今の世の人はそれを知らぬべなり。

この例の如く、句の中にある係の助詞は文の終止には影響せず。

練習問題

- 次の文の係結法に誤あらば正せ。
- 一。かの正成の忠勇を知らぬ人こそ無かりけれ。
  - 二。瀧の音ぞこだまに響きて、ものすごけれ。
  - 三。人のおとづればかり嬉しきものは無けれ。
  - 四。身の幸、何事がこれに過ぎ申すべし。
  - 五。人はわかき程にこそものまなびもすべきけれ。
  - 六。山のかひより月なんさやかに照り出でたり。
  - 七。なき父の面影はかくやありき。
  - 八。春こそ歳の内の最も樂しき時なる。
  - 九。今日こそわれは學校を卒業するなり。
  - 一〇。鹿の鳴く聲を聞く時なむ秋は悲しき。



第十五章 文の解剖

主部、説明部。 文の成分につきては既に説きたり。 更に文の組織及び成分を検する便宜より、文の成分を分類して、主語とこれに附屬する修飾語とを併せて主部とし、述語と客語、補語と及びこれらに附屬する修飾語とを併せて説明部とす。 されば、いづれの單文も複文も、皆必ずこれを主部と説明部とに分つことを得べし。 次に單文及び複文を主部と説明部とに分ちたる數例を示さん。 その——のある部分は主部にて、——のある部分は説明部なり。

鳥飛ぶ。

われは外國に行く人を送る。

梅の花甚だ美しく咲く。

禮儀を守るは人と交る道なり。

象は體大なり。

わが最も愛讀する書は徒然草なり。

文の解剖。 一つの文に就きて、その組織、成分を検し、一つ一つに分解して、これが關係を明かにすることを、文の解剖といふ。

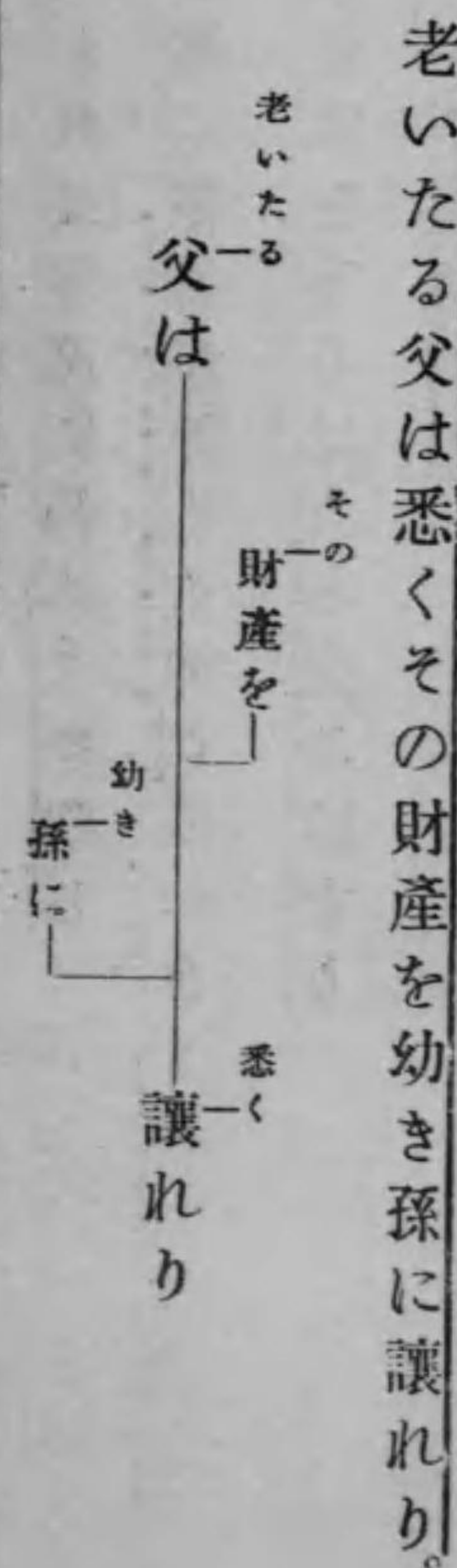
文を解剖するには、まづ單文か複文か重文かの別を明かにし、さて單文ならば、次の順序によるべし。

(一) 主要成分の省略せられたるときは、これを補ふべし。

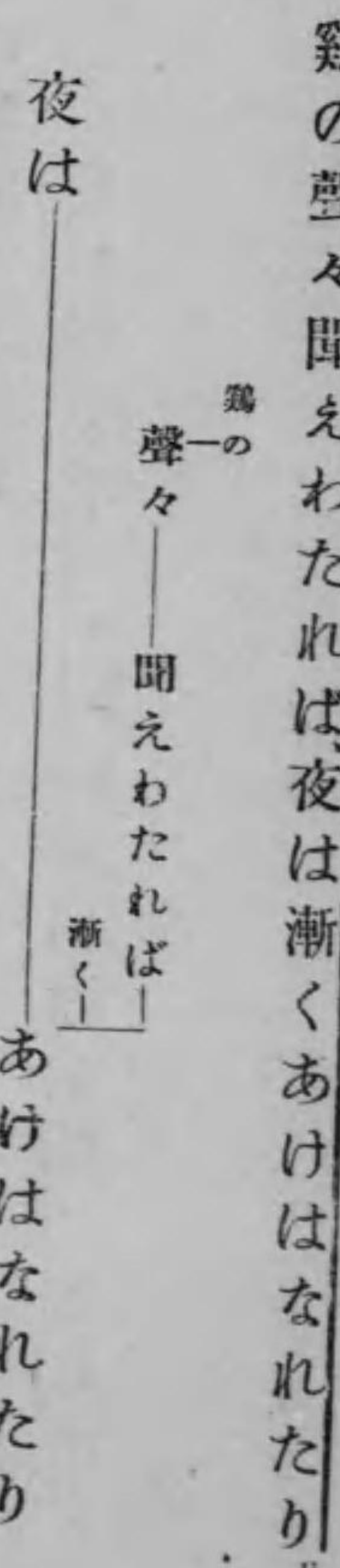


- (二) 主部と説明部とに分つべし。
  - (三) 主部に就きては、主語と修飾語とを指示すべし。
  - (四) 説明部に就きては、述語とその修飾語と、客語とその修飾語と、及び補語とその修飾語とを指示すべし。
- 複文ならば、以上の順序によりて、更にその句を解剖すべし。また重文ならば、同じく以上の順序によりて、その各節を解剖すべし。

**単文の解剖。** 次に単文を解剖する例を示す。

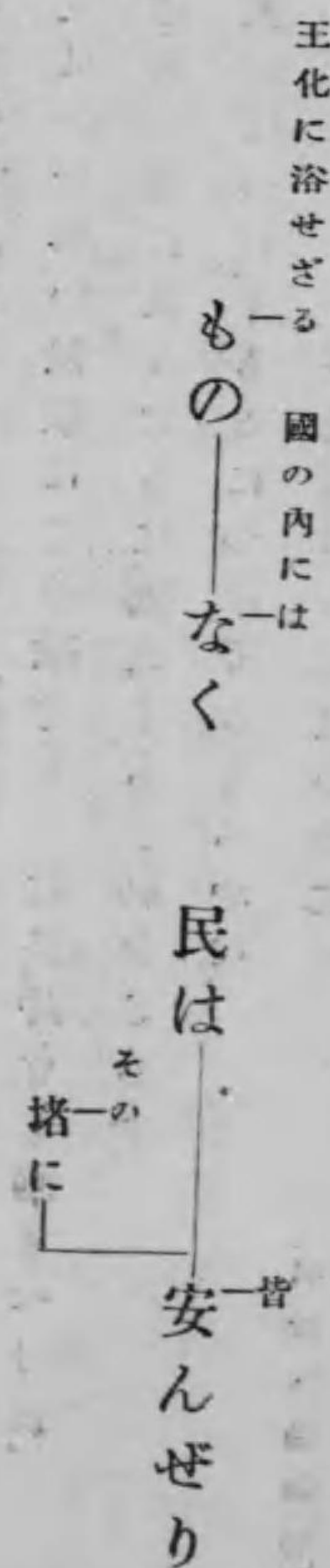


**複文の解剖。** 次に複文を解剖する例を示す。



**重文の解剖。** 次に重文を解剖する例を示す。

國の内には王化に浴せざるものなく、民は皆その堵に安んぜり。



練習問題

次の文を解剖せよ。



11  
2  
300

一、鷺は鳥の王といはる。  
 二、その矢はあやまたす扇の要を射たりき。  
 三、女は針仕事の餘暇にこそ歌をもうたひ、詩をも誦すべけれ。  
 四、窮鳥の懐に入りたるは、獵夫すらこれをとらず。  
 五、照るにつけ、くもるにつけておもふかな。  
 わが民草のうへはいかにと。  
 (明治天皇御製)

女子教育 日本文法教本 下巻終

明治四十三年三月三日印  
 明治四十三年五月六日發行  
 大正四年九月廿四日訂正四版發行  
 大正五年七月廿五日訂正三版發行  
 大正五年九月廿七日訂正四版發行

女子日本文法教本  
 下巻金拾五錢



著者 金澤庄三郎  
 發行所 株式會社 東京開成館  
 代表者 牧瀬五一郎  
 東京市小石川區小日向水道町七十三番地  
 株式會社 東京開成館  
 代表者 林平次郎  
 東京市日本橋區數寄屋町九番地  
 發行所 株式會社 東京開成館  
 代表者 三木佐助  
 大阪市東區北久寶寺町心齋橋通北久寶寺角  
 株式會社 東京開成館  
 代表者 林平次郎  
 東京市日本橋區數寄屋町九番地



終

